

<序 文>

小郡市は、北部・中南部における宅地開発や北東・中南部における工業団地の開発が相次いで行われ、現在福岡・久留米両市のベッタタウンとして日々発展を続けています。これに伴い、交通網の整備も着々と進行しつつあります。

今回ここに報告いたします「大保西小路遺跡3」は、宅地造成に伴う道路建設に先だって小郡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。遺跡は、三国丘陵からなだらかに伸びる沖積地であり、宝満川、口無川、高原川などによって形成された沖積台地上に築かれています。本遺跡が所在する大保区は、近年の開発に伴う発掘調査により中世を中心とした遺跡が多数発見されています。特に、大保西小路遺跡の包蔵地内では、これまでも中世に比定される鍛冶に関連すると考えられる遺物が多数まとまって出土しており、当時の鍛冶の広がりについて解明することが期待されておりました。今回の調査で、ついに中世に比定できる鍛冶炉跡を検出することができ、中世の生産業に関する解明に向けた大きな成果を上げることができました。これらが、小郡市内における中世の村落形態の全体像を解明するに当たり、その一助となれば幸いです。

最後になりましたが、地権者さん、調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々へ深く感謝を申し上げ、序文といたします。

平成 28 年 3 月 31 日
小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

<例 言>

- 1、本書は、小郡市大保区内における宅地造成に伴う道路造成事業に伴って、小郡市教育委員会が平成 26 年度に発掘調査を行った大保西小路遺跡3の埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2、遺構の実測、遺構の写真撮影は西江幸子が実施した。
- 3、遺物の実測は西江、製図は久住愛子、白木千里、洗浄・復元には、衛藤知嘉子、佐々木智子、藤岡忠子、深町幸子、山川清日、水富加奈子、図面作成に宮崎美穂子ら諸氏に多大なる協力を得た。また、遺物の写真撮影は(有)システム・レコに委託した。
- 4、遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系(世界測地系)に拠している。
- 5、本書で用いた標高は、東京湾平均海面(T. P.)を基準としている。
- 6、本書で用いている略号は以下のとおりである。
溝：SD 土坑：SK ビット：P
- 7、遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
- 8、本書の執筆・編集は西江が担当した。

本文目次

第1章 調査の経過と組織	1	第4章 遺構と遺物	3
1. 調査の経緯		1. か跡	
2. 調査の経過		2. 溝	
3. 調査の体制		3. 土坑	
第2章 位置と環境	2	4. ビット	
第3章 遺跡の概要	3	第4章 まとめ	13

挿図目次

第1図	大保西小路遺跡3調査地位置図 (S = 1/2500)
第2図	大保西小路遺跡3周辺遺跡分布図 (S = 1/25000)
第3図	1号・2号か跡実測図 (S = 1/20)
第4図	1号・2号・3号・4号溝土層断面実測図 (S=1/40)
第5図	1号溝下層出土遺物実測図 (10: S=1/2、その他: S = 1/4)
第6図	2号・3号・4号溝出土遺物実測図 (S=1/4)
第7図	1号・2号・3号土坑実測図 (S = 1/40)
第8図	4号・5号・6号土坑実測図 (S=1/40)
第9図	2号・3号・4号・6号土坑出土遺物実測図 (S=1/4)
第10図	ビット出土遺物実測図 (S=1/4)
第11図	大保西小路遺跡鍛冶関係遺構配置図 (S=1/1000)
第12図	小郡市内における鍛冶関係遺物出土遺跡分布図 (S=1/75000)
付 図	大保西小路遺跡3 遺構配置図 (S=1/100)

表目次

大保西小路遺跡3出土遺物観察表

図版目次

図版1	①調査区全景 (南側から) ②調査区全景 (北側から) ③調査区中央より南側全景 (北西側から) ④調査区中央より北側全景 (南東側から)	⑤3号溝完掘 (南側から) ⑥4号溝完掘 (東側から) ⑦4号溝東壁土層断面 (西側から)	
図版2	①1号か跡検出状況 (南側から) ②2号か跡検出状況 (南側から) ③1号・2号か跡検出状況 (南側から) ④1号・2号か跡検出状況、4号溝完掘 (西側から) ⑤1号溝西壁土層断面 (東側から) ⑥1号溝東壁土層断面 (西側から) ⑦1号溝完掘 (西側から) ⑧2号溝東壁土層断面 (西側から)	図版4	①1号土坑完掘 (東側から) ②2号土坑東西ベルト土層断面 (北側から) ③2号土坑完掘 (東側から) ④3号土坑完掘 (東側から) ⑤4号土坑土層断面 (南側から) ⑥4号土坑完掘 (南側から) ⑦5号土坑東壁土層断面・完掘 (西側から) ⑧6号土坑完掘 (南側から)
図版3	①2号溝西壁土層断面 (東側から) ②3号溝南壁土層断面 (北側から) ③2号溝完掘 (西側から)	図版5	出土遺物①
		図版6	出土遺物②

第1章 調査の経過と組織

1. 調査の経緯

大保西小路遺跡3の発掘調査は、小郡市三沢字権道38-1における宅地造成事業に先立ち、地権者より平成25年12月16日付で小郡市教育委員会に対して埋蔵文化財の有無に関する照会(審査番号3102)が提出されたことに始まる。市教委では、これを受けて平成26年2月27日に申請地の試掘調査を行った結果、地表下約40cmの深さで遺構が確認されたため、開発に先立って埋蔵文化財に関する協議を行った。

協議の結果、敷地のうち宅地造成事業に伴う道路造成事業地についての160㎡について発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の経過

発掘調査は平成26年5月14日から同年6月5日にかけて実施した。調査の主な経過は以下のとおりである。

- 5月14日 表土剥ぎ開始。(～16日)
- 5月19日 発掘作業員を投入し、遺構検出・掘削開始。
- 5月29日 全景写真撮影。
- 5月30日 遺構実測終了。
- 6月2日 埋戻し。
- 6月5日 現場引き渡し、調査完了。

以後、図面・遺物整理作業及び報告書作成実施。

3. 調査の体制

大保西小路遺跡3の調査の体制は、以下のとおりである。

[平成26年度]

小郡市教育委員会		
教育長	清武 輝	
教育部長	佐藤 秀行	
文化財課長	片岡 宏二	
係長	柏原 孝俊	
技師	西江 幸子	(調査担当)

[平成27年度]

小郡市教育委員会		
教育長	清武 輝	
教育部長	佐藤 秀行	
文化財課長	片岡 宏二	
係長	柏原 孝俊	
技師	西江 幸子	(整理担当)

[発掘作業従事者]

草場誠子、土井久江、松永康弘、宮崎隆明
(敬称略)



第1図 大保西小路遺跡3調査地位位置図
(S=1/2500)

第2章 位置と環境

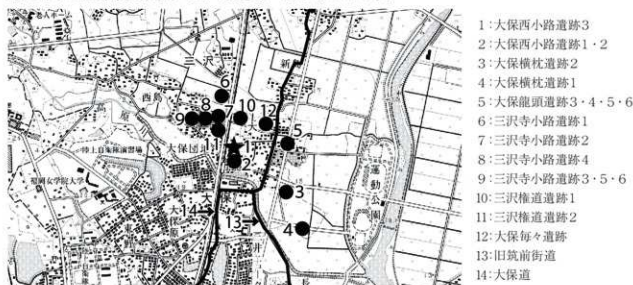
小郡市は、中央部を南北に宝満川が流れ、北西部に通称三国丘陵、北東部に花立山（標高130.8 m）から伸びる丘陵があり、南側は緩やかに下る平坦な台地へ移行し、筑後平野へと連なる。

大保西小路遺跡3（1）は、三国丘陵からなだらかに伸びる低台地の縁辺部に位置し、本遺跡周辺の西鉄沿線側は、宝満川周辺よりも標高が高い。

大保西小路遺跡は、これまでに5回調査が行われている。第1次調査では、14～16世紀に相当する鑄羽口や銚型、鉄銚等鍛冶関連の遺物・遺構が発見された（2：市報告99集）。第2次調査では、15～16世紀に相当する大型の土坑が発見された（2：市報告257集）。また、第4次調査・第5次調査・第6次調査を第3次調査と同年度に行っており、今年度報告書刊行予定である。以上より、大保西小路遺跡包蔵地内では鍛冶関連の遺構・遺物が多数検出されていることから、中世における鍛冶生産に関する復元が期待されている地域である。以下では、大保区周辺地域に分布する遺跡を中心に歴史的環境の概要を示す。

大保区内において最初に人々の活動が確認されたのは、縄文時代であり、大保横枕遺跡2（3：市報告260集）で、縄文土器を伴って石組炉や落とし穴状遺構が検出された。続く弥生時代になると、同じく大保横枕遺跡2で前期に比定される二重環濠を持つ集落が発見される。その南に位置する大保横枕遺跡1（4：市報告137集）と伴に甕棺墓が広がっていた。古墳時代には、大保横枕遺跡2や大保龍頭遺跡3・4・5・6（5：市報告135・140・183・187集）を中心に竪穴式住居跡が検出されている。古代になると、集落域は西側の三沢寺小路遺跡（6・7・8・9：市報告117・158・222・229・263集）に移動する。中世になると、小郡市内でも特に遺跡が多数検出されている地域となる。11世紀後半から大保龍頭遺跡・大保横枕遺跡2で集落が形成され、1359年の大保原合戦の影響か、14世紀代より、集落域をこれらの遺跡の西側の大保西小路遺跡、三沢寺小路遺跡、三沢権道遺跡（10・11：市報告82・125集）、大保毎々遺跡（12：市報告223集）を中心とした地域へと移動する。また、中世から江戸時代初期にかけて人々の往来道であった旧筑前街道（13）が、大保区内を御勢大霊石神社前の道で南北方向に通っていることから、人々の活発な活動が想定される。近代以降に関する遺跡は、現時点ではあまり発見されていない。しかし、小郡町を起点に旧筑前街道へとつながる大保道（14）が大保区内に通っており、伊能忠敬の測量時にも御勢大霊石神社まで通ったことが測量日記や測量図より判明していることから、重要な往来道であったことが窺える。

小郡市内において中世に関する文献資料は少ないため、他の時代と比較して歴史的復元がなかなか行えていない。しかし、近年の特に大保区内における中世の遺跡の発見は、今後、この地における社会像を探索する上で大きな一助となるだろう。



第2図 大保西小路遺跡3周辺遺跡分布図（S = 1/25000）

第3章 調査の成果

大保西小路遺跡3は、周知の埋蔵文化財包蔵地の北端西側よりに相当する。宅地造成のための道路設置工事部分のみの発掘調査であったため、南北約16m、東西約4.6mの非常に狭小な範囲である。遺構検出面の標高は18.7m前後、現地表面から約0.3m下る高さで確認している。層位は、灰黄褐色土の整地層が堆積し、その下より遺構検出面である黄褐色ローム層を検出した。

出土遺構は、鎌倉時代の溝4条と炉跡2基、土坑5基、その他多数のピットを検出した。検出した炉跡からは、焼土や炭、鉄器を確認した。これらの炉跡のすぐ北側には東西方向に延びる中世の溝1条が位置しており、溝の埋土中位より鉄滓を多数検出した。また、遺跡中央部で確認した溝からも鉄器が出土している。しかしながら、全体的には、遺構密度の割に遺物はほとんど出土しなかった。

大保西小路遺跡3で検出した遺構・遺物は以下のとおりである。

●遺構

・溝	4条	・土坑	5基
・炉跡	2基	・ピット	

●遺物

・土師器	・陶器	・瓦
・須恵質土器	・白磁	・石器
・青磁	・鉄滓	

第4章 遺構と遺物

1. 炉跡

1号炉跡（第3図、図版2・6）

調査区の北側において検出した炉跡2基の内、東側の炉跡である。遺構は、検出時より上面が赤変していた。平面形が47cm×38cmの楕円形を呈し、深さは最大24cmを測る。北東側にテラス状の高まりを持つ。この高まりの底辺と炉と考えられる焼土の底辺のレベルが一致することから、このテラス状の高まりは、炉を機能させる際に使用する作業場の意図があり焼土の底辺のレベルに合わせて掘り込んだと考えられる。

炉と考えられる焼土は、遺構検出面の高さから深さ14cmまで検出しており、中央部に向かって丸く窪み形状をしている。おそらく、小鍛冶用の粘土貼炉であったと考えられる。

遺物は外面に黒っぽい色をした釉薬がかかった陶器の小片が1点出土したのみであるが、図化するにいたらなかった。しかし、炉の内部からは鉄滓が67.5g（図版6-11）とまとまって出土した。

2号炉跡（第3図、図版2・6）

調査区の北側において検出した炉跡2基の内、西側の炉跡である。遺構は、検出時より上面が赤変していた。平面形が44cm×35cm、深さが最大22cmの楕円形の遺構（以下、北側遺構）と、平面形が45cm×38cm、深さが最大27cmの楕円形の遺構（以下、南側遺構）とが隣接した形で形成されている。断面形をみると、北側遺構の方が浅い。

炉と考えられる焼土は、北側遺構と南側遺構との境の南側遺構の立ち上がり部分側をカバーするように検出し、深さ5～10cmで焼土が東西方向に壁状に敷き詰められていた。おそらく、南側遺構が小鍛冶用の粘土貼炉として使用された掘り込みで、北側遺構は炉に付随する作業場の意図があった空間ではないかと考えられる。

遺物は土師器の小片が1点出土したのみであるが、図化するにいたらなかった。しかし、炉内部からは鉄滓が62.5g（図版6-12）とまとまって出土しており、鍛冶を行っていた炉と想定される。

2. 溝【SD】

1号溝（第4図、図版2）

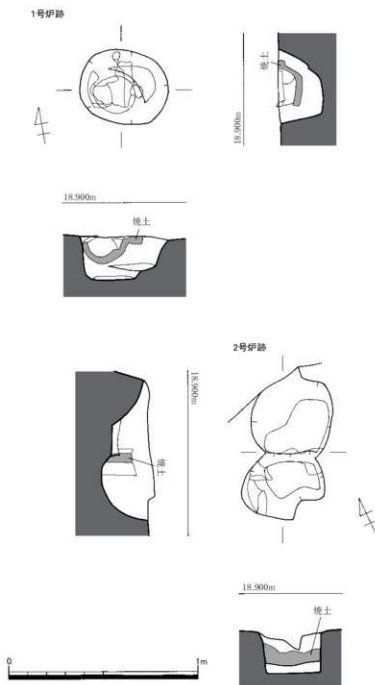
調査区の中央部北側よりに位置し、4号土坑を切り、調査区外へと延びる。溝は、東西方向に伸び、北辺・南辺の両側に遺構検出面から約20cmのところまでテラスを持つが、南辺は東側でテラスがなくなる。現状で全長約4.6m、幅1.95～2.4m、深さ最大0.9mを測り、断面形状は逆台形を呈する。

埋土は、水平堆積の様相を示す。溝の軸が正東位であることから、区画溝として利用されていた可能性が想定される。埋土からは、土師器の皿や鍋の小片、須恵質の片口すり鉢の口縁部等の遺物が少量出土しているが、図化するに至ったものは少ない。また、最下層より鉄滓92.0gが出土している。

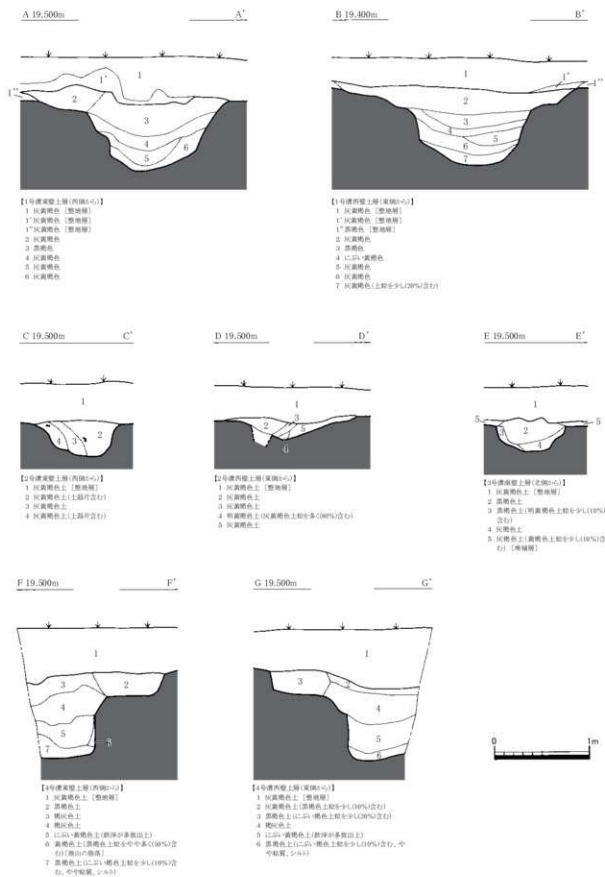
出土遺物（第5図、図版5）

1・2は土師器の皿である。底部は糸切りが施されている。2は口径に対して底径が小さい。3は土師器の鍋の口縁部片である。粘土紐貼り付け等により口縁端部を肥厚させ、内面にはハケメ調整が施されている。4は白磁の碗の底部片である。肉厚な底部に、外面高台部分は軸葉が垂れるようになり、外面底部には軸葉は施されていない。5は青磁の碗の底部片である。肉厚な底部に、内面見込みに文様を片彫りしている。6は青磁の皿の底部片である。外面底部部分は軸葉が削り取られている。7・8は陶器の甕である。同一個体と想定できるが、胴部の欠損部分が多く、検証できなかった。9は平瓦の細片である。10は黒曜石のナイフ形石器である。11は不明石器である。裏面は剥離しているが、表面には研磨痕が見られ、また、被熱のためやや黒っぽくなっている。おそらく砥石と考えられるが、形状が円形をしており、被熱も受けている等通常の砥石とは異なる点も見られることから断定はできない。

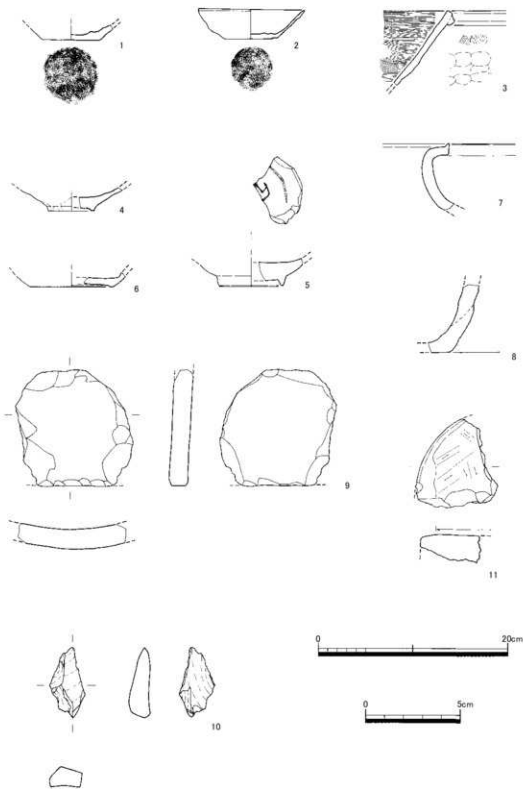
以上の形態的特徴より、4～6は13世紀後半～14世紀に比定できるが、多くは14世紀～15世紀に比定できる。



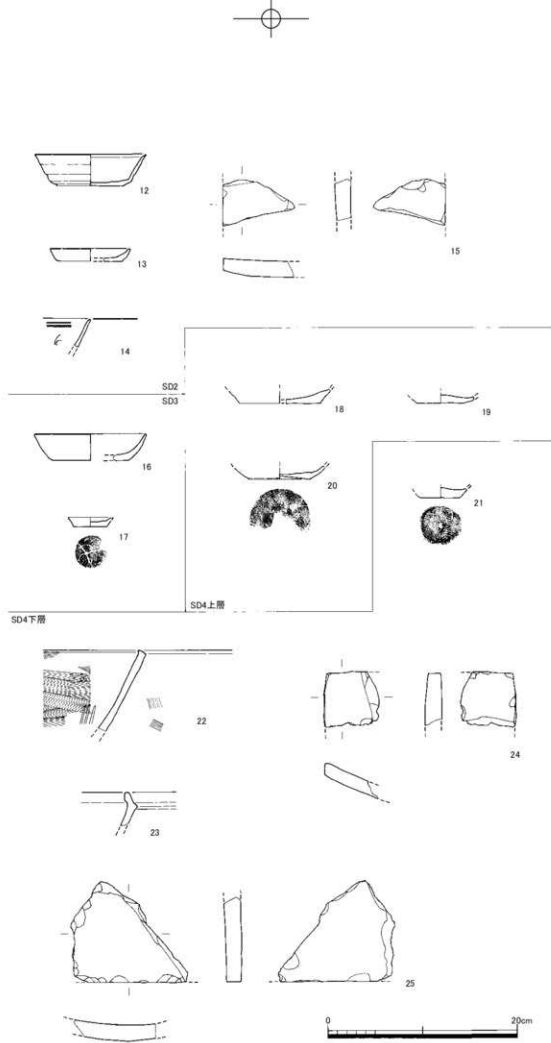
第3図 1号・2号炉跡実測図（S = 1/20）



第4図 1号・2号・3号・4号溝土層断面実測図 (S=1/40)



第5図 1号溝下層出土遺物実測図(10:S=1/2、その他:S=1/4)



第6图 2号·3号·4号清出土物实测图 (S=1/4)

2号溝（第4図、図版2・3）

調査区の中央部に位置し、南辺の一部を後世の礎石により切られており、調査区外へと延びる。溝は、東西方向に伸びる。溝の内部には多数のピットを確認しているが、遺構に伴う施設であるかどうかは不明である。現状で全長約43m、幅約0.9m、深さ最大0.4mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は、水平堆積の様相を示す。溝の軸が正東位であることから、区画溝として利用された可能性が想定される。

埋土から土師器の鍋や皿の小片が少量出土しているが、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物（第6図、図版5）

12・13は土師器の皿である。器高は、12が3.3cm、13は1.35cmであることから、器高の高い形式と低い形式が出土しているが、どちらも底部は糸切りが施されている。14は青磁の椀の口縁部片であり、胴部内面におそらく飛雲文と想定される文様を片彫りしている。15は平瓦の細片である。残念ながら、ナデ調整のみ確認している。

以上の形態的特徴より、12世紀中頃～13世紀前半に比定できるが、図化できなかった小片には土師器の鍋の口縁部片も数点検出しており、15世紀まで下る可能性がある。

3号溝（第4図、図版3）

調査区の南西隅に位置し、6号土坑を切り、攪乱2基に切られ、調査区外へ延びる。南側から北側に向かってだんだん深くなる溝である。現状で全長約7.9m、幅約0.8m、深さ最大35cmを測り、断面形状は凸レンズ状を呈する。埋土は、水平堆積の様相を示す。

埋土から土師器の鍋や皿の小片が少量出土しているが、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物（第6図、図版5）

16・17は土師器の皿である。器高は、16が2.8cm、17は1.0cmであることから、器高の高い形式と低い形式が出土しているが、どちらも底部は糸切りが施されている。

以上の形態的特徴より、13世紀代に比定できるが、図化できなかった小片には土師器の鍋の口縁部片も数点検出しており、15世紀まで下る可能性がある。

4号溝（第4図、図版3）

調査区の北辺に位置する。溝の南辺のみを検出しており、溝の北辺を含め、調査区外へ延びる。南辺に遺構検出面から20～25cmのところまでテラスを持つ。現状で全長約3.6m、幅1.5～1.7m、深さ最大0.95mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は、水平堆積の様相を示す。

埋土から土師器の鍋や皿の小片が少量出土しているが、図化するに至ったものは少ない。なお、出土遺物記載の内、上層は遺構検出面からテラスまで、下層はテラスから底面までと区分している。また、埋土の下層部分の内上層に近い地点より鉄滓が910g（図版6-13）出土した。おそらく、4号溝の南側に位置する炉跡で使用されたものが捨てられたものと考えられ、4号溝も鍛冶関係に使用された遺構の可能性が高いと想定される。

出土遺物（第6図、図版5）

18～20は上層より出土した土師器の皿である。底部は全て糸切りが施されている。

21～25は下層より出土した。21は土師器の皿であり、底部が厚く、口縁部が欠損しているものの、残存部位の形状からそれほど器高が高くないことが予想され、轆轤成形により製作されたと想定される。底部は糸切りが施されている。22は土師器のすり鉢の口縁部片である。口縁端部の内面を強くなでること、端部を内側にやや突出させている。内面にはハケメ調整と単位不明のすり目が施されている。23は東播系と考えられる須恵質のすり鉢の口縁部片である。口縁端部は内側に逆くの字状に屈曲させている。24・25は平瓦の細片である。残念ながら、ナデ調整のみを確認している。

以上の形態的特徴から、およそ15世紀に比定できると考えられるが、23のみ古相を呈しているようにみえる。14世紀中葉に東播系須恵質土器は産地での生産が中止されたと想定されているが、広島県草戸千軒遺跡では15世紀前半～中葉に23と同様のタイプが出土していることから、23も15世紀に比定できよう。

3. 土坑【SK】

1号土坑（第7図、図版4）

調査区の中央部において検出した土坑であり、後世の礎石に東側が切られている。土坑の内径は直径25cm、深さ6cmの1基のビットを確認しているが、遺構に伴う施設かどうかは不明である。平面形は、現状110cm×125cmの長方形を呈し、深さは最大19cmを測る。

遺物は土師器の皿の小片が2点出土したのみであるが、小片のため図化するに至らなかった。

2号土坑（第7図、図版4）

調査区の中央部において検出した土坑である。遺構検出面の一部が後世の礎石により切られているが、遺構の規模を確認する上で問題はなかった。平面形は、297cm×134cmの長方形を呈し、深さは最大40cmを測る。当初は、遺構の規格から土壌墓を想定したが、遺物がほとんど出土しなかったため、土坑として報告することとし、遺構図版を組んだ。しかし、近隣の大保龍頭遺跡3より同様な形態をした土壌墓の報告がなされていることから、土壌墓の可能性は否定できない。

遺物は土師器の皿の小片を中心に少量出土したのみであるが、小片のため図化するに至ったものは少ない。また、埋土中より鉄滓が145g出土した。

出土遺物（第9図、図版6）

26～29は土師器の皿であり、底部に糸切りが施されている。26・27は、器高が高い形式、28・29は器高が低い形式である。特に、28・29は底部が厚く、胴部がつまみ出したような形態をしていることから、轆轤成形が想定される。30は東播系と考えられる須恵質の鉢の口縁部片である。外斜する胴部から口縁部は上側に直立気味に屈曲させている。外面には口縁部と胴部にコゲが付着している。

以上の形態的特徴より、14世紀前半～中頃に比定できる。

3号土坑（第7図、図版4）

調査区の中央部西辺において検出した土坑である。南東隅にはテラス状の高まりを持つ。平面形は、現状136cm×112cmの長方形を呈し、深さは最大40cmを測る。西側方向に向かって深く掘り込まれている。当初は、遺構の規格から土坑と想定し、遺構図版を組んだ。しかし、報告書を執筆する過程の中で近隣の大保龍頭遺跡3より同様な形態をした土壌墓の報告がなされていることがわかった。遺構の西側が調査区壁より西側に続いていると想定されるもの本遺跡の2号土坑の遺構の規模と類似しており、かつ、2号土坑とほぼ並行した位置で遺構を検出していることから、土壌墓の可能性は否定できない。

遺物は土師器の皿の小片を中心に数点上層からのみ出土したが、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物（第9図、図版6）

31・32は土師器の皿であり、底部に糸切りが施されている。31は器高が高い形式、32は器高が低い形式である。特に、32は底部が厚く、胴部がつまみ出したような形態をしていることから、轆轤成形が想定される。

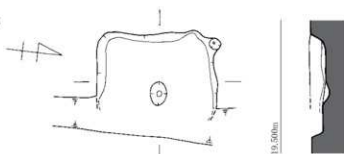
以上の形態的特徴より、14世紀前半～中頃に比定できる。

4号土坑（第8図、図版4）

調査区の中央部北よりにおいて検出した土坑であり、1号溝に切られる。遺構の北側には、直径約50cm、深さ17cmのビット1基があるが、この土坑に伴う施設かどうかは不明である。平面形は、現状140cm×106cmの楕円形を呈し、深さは最大25cmを測る。

遺物は土師器の小片と須恵質の胴部片が数点出土したのみであるが、図化するに至ったものは少ない。

1号土坑



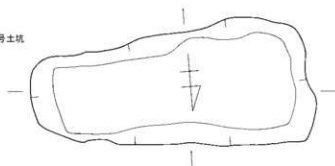
19.500m



【1号土坑南北→A→土層(深層)→C】

- 1 黒褐色土にL25%・黄褐色土粒を中々多(25%)含む
- 2 黒褐色土に層2中上表面にL12.5%・黄褐色土粒を中々L20%→黒色土粒を中々L20%含む

2号土坑



19.000m

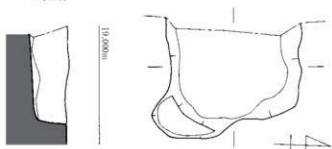


【2号土坑東西→A→土層(深層)→C】

- 1 黒色土に明黄褐色土粒を少L10%含む、L20%含む
- 2 黒色土(L→A)
- 3 黒色土に明黄褐色土粒を少L15%含む

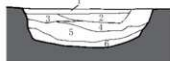
【1号土坑南北→A→土層(深層)→C】
 1 黒色土に明黄褐色土粒を少L10%含む、L20%含む
 2 黒色土(L→A)
 3 黒色土に明黄褐色土粒を少L15%含む

3号土坑



19.000m

19.000m



【3号土坑南北→A→土層(深層)→C】

- 1 黄褐色土
- 2 黄褐色土に明黄褐色土粒を少L20%含む
- 3 黄褐色土に明黄褐色土粒を少L20%含む
- 4 黄褐色土に明黄褐色土粒を中々多(20%)含む
- 5 黒色土に明黄褐色土粒を明黄褐色土粒を中々多(40%)含む
- 6 黒色土に明黄褐色土粒を明黄褐色土粒を少L10%含む



第7図 1号・2号・3号土坑実測図 (S=1/40)

出土遺物（第9図）

33は東播系と考えられる須恵質のすり鉢の口縁部片である。口縁端部は内側に逆くの字状に屈曲させている。

5号土坑（第8図、図版4）

調査区の中央部東辺において検出した土坑である。2段掘りになっており、平面形は、現状120cm×50cmの楕円形を呈し、深さは13cmを測る。2段掘りの内側西よりには、直径約25cm、深さ33cmのピットが1基ある。遺構の形状より、柱穴の可能性も考えられるが、周囲に柱穴と考えられる土坑やピットを検出できていないことから、想像の域を出ない。

遺物は土師器の小片が数点出土したのみであるが、小片のため図化するに至らなかった。

6号土坑（第8図、図版4）

調査区の南辺西側よりにおいて検出した土坑であり、3号溝に切られる。遺構の南側にはテラス状の高まりを持つ。平面形は、70cm×50cmの楕円形を呈し、深さは最大44cmを測る。

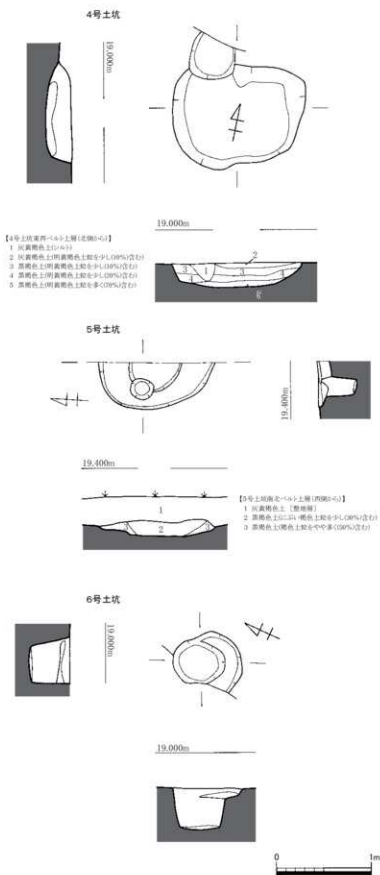
遺物は土師器の皿の小片が数点出土したのみであるが、小片のため図化するに至ったものは少ない。

出土遺物（第9図、図版6）

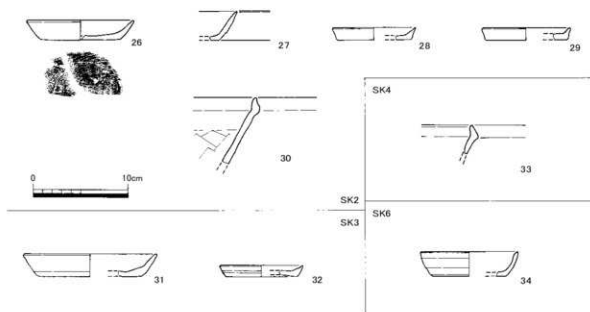
34は土師器の皿である。口径と底径の差が小さく、底部に糸切り後に板押しを施していることから、14世紀中頃以前の遺構と想定される。

4. ピット [P]

調査区中央部の1号溝から3号土坑までの間を中心に多数のピットを確認した。そのうち、遺物が出土したピットは20基存在し、時代も中世が中心である。小片のため図化するに至ったものは少ないが、P5から炭、P20から土塊が出土しており、特筆できる。以下では、図化するに至った出土物について記す。



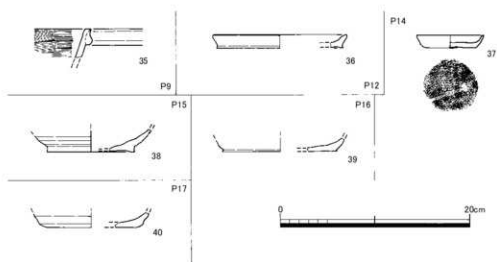
第8図 4号・5号・6号土坑実測図 (S=1/40)



第9図 2号・3号・4号・6号土坑出土遺物実測図 (S=1/4)

出土遺物 (第10図、図版6)

35はP9から出土した土師器の鍋の口縁部片である。粘土紐貼り付け等により口縁端部を外側に肥厚させ、内面にはハケメ調整が施されている。36はP12から出土した土師器の皿である。底部は糸切りが施され、底部が厚く、胴部がつまみ出したような形態をしていることから、轆轤成形が想定される。37はP14から出土した土師器の皿である。底部は糸切りが施されている。38はP15から出土した土師器の皿である。底部から胴部へと変化する形態において、一度底部から直線的に胴部が伸びた後に、湾曲しながら胴部が口縁部へと伸びている。底部は糸切りが施されている。39はP16から出土した土師器の皿である。底部から胴部への変化形態は、38と同様であり、底部は糸切りが施されている。40はP17から出土した土師器の皿である。底部には糸切りが施され、底部から胴部へはゆるく湾曲しながら伸びている。



第10図 ビット出土遺物実測図 (S=1/4)

第5章 まとめ

今回の調査で検出した遺跡に対して評価をするにあたり、まず、各遺構の時期についてまとめたい。その後、大保西小路遺跡の包蔵地を代表する鍛冶関連遺構を本調査地においても検出できたので、概論ではあるが小郡市内における鍛冶関連遺構について考察を行いたい。

1. 大保西小路遺跡3の遺構の時期とその変遷について

まず、各遺構の切り合い関係や出土遺物により時期が明確なものは、以下のとおりである。なお、今回の調査（以下3次調査）では、遺構の切り合い関係のみにより時期を特定したものは見当たらなかった。

12世紀中頃～13世紀前半	：2号溝、3号溝
13世紀	：6号土坑
14世紀前半～中頃	：2号土坑、3号土坑、4号土坑
15世紀	：4号溝
13世紀後半～15世紀	：1号溝

小郡市内における中世に比定できる遺跡の多くでは、集落の境界や集落内の小区画を占める溝状遺構を多数確認しており、今回の調査で検出した溝もこれらに相当する可能性が高い。今年度は、本調査地の西側の隣接地において、大保西小路遺跡4（以下4次調査）と大保西小路遺跡5（以下5次調査）の発掘調査を実施している。3次調査の遺構評価をするには、4次調査・5次調査の内容も踏まえ検討を行うことが必要となるので、遺構の性格付け等については、『大保西小路遺跡4・5調査報告書』（市報告301集）の中で考察を行っているので参照いただきたい。

2. 小郡市内における鍛冶関連遺構について

鍛冶炉とは、構造的にも工程的にも発達した近世の大鍛冶から工程を区分すると、精錬鍛冶（精錬製造工程）と鍛錬鍛冶（道具の製作・修理などのいわゆる小鍛冶）になる。これら2つの工程は、時代を経るにつれ、その遺構の出現姿も異なってくるのが先行研究より明らかである。以下では、日本への鉄の流入から鍛冶関連遺構の時代変遷についてこれまでの研究成果を概観する。その後、小郡市内における鍛冶関連遺構について考察する。

鉄器は、外来文化として朝鮮半島より流入し、北部九州では弥生時代中期に鉄製品が出現した。弥生時代後期になると、実用的な鉄器の普及が格段に進み、製品の種類も増加する。当時、鉄は貴重なもので、何度も再利用されたと考えられている。また、弥生時代は、鉄を鉱物から精製する技術はなく、本格的な鑄造製品は舶載品、簡単な殴打で整形できる製品は素材を輸入し、国内で製作したものと考えられている。古墳時代になると、やや大型の炉と小型の炉の2種類の遺構が検出されているが、これらが精錬鍛冶と鍛錬鍛冶に区分可能かどうかは資料不足の為不明とされている。しかし、製鉄と鍛冶に携わる専門の職人が存在し、分業化が始まってきたことは示唆されている。古代になると、炉の平面形は円形が主流で、資料不足は否めないものの、直径20～60cmの小型炉が小鍛冶炉（鍛錬鍛冶炉）用、直径70～80cmの大型炉が精錬鍛冶炉と想定されている。また、1遺跡の中に大型炉と小型炉が検出できることから、精錬と鍛錬の分化が始まったと考えられている。また、こうした炉を検出する立地も「集落内」や「製鉄遺跡の中」や「官衙や寺院などに敷設されるもの」などバリエーションも見られる。中世になると、古代同様に小鍛冶炉（鍛錬鍛冶炉）と想定される小型炉と精錬鍛冶炉と想定される大型炉が1集落内で検出でき、これらの炉の規模も古墳時代よりほとんど変化していない。また、集落内で検出される鍛冶炉が定住した職人による生産の跡が集落を訪れて鍛冶をする職人の生産の跡かはいまだ論議がなされている。網野善彦氏によれば、南北朝時代以降、鎌倉時代とは比較にならないほど一般庶民の生活の中に鉄器が浸透していることから（網野1983）、鍛冶の需要も拡大したと考えられる。そして、近代になると、中国山地でみられるような規模も大きなたたら吹を用いた製鉄遺跡が出現する。

では、上記のような製鉄遺跡に関する先行研究を踏まえ、小郡市の状況を概観したい。小郡

市の製鉄関連遺物・遺構が出土した遺跡を集成するにあたり、中島圭氏により集成された「製鉄・鍛冶関連遺物出土地地名表」(中島2008)に依拠して集成を行った。

小郡市内では、弥生時代より鉄製品が遺跡より出土しているが、鉄滓等の製鉄・鍛冶の痕跡が検出されるのは古墳時代からである。集落遺跡では、横隈北田遺跡(1:市報告48集)や力武内畑遺跡(2:市報告174集)では住居から轆轤口が、津古生掛遺跡(3:市報告50集)からは住居、土坑、包含層と広い範囲で鉄滓が出土している。一方、墓域では、6世紀後半頃には花立山2号・4号・6号横穴墓(4:市報告147集)に鍛冶具が副葬されている。古代になると、7~8世紀においては、御原郡衙に比定されている小郡官衙遺跡や上岩田遺跡周辺において製鉄・鍛冶の痕跡が遺物より検出されている。小郡官衙遺跡と官道を媒介して結ばれている小郡前伏遺跡(5:県横断11集)では、堅穴住居跡より、鉄滓・轆轤口・砥石が出土しており鉄生産を担う工房的な様相を示す集落と評価されている(柏原・宮田2001)。また、上岩田遺跡(6:市報告200・248・252・261集)内では、堅穴建物を中心に土坑等からも多くの鉄滓が出土している。これらは、「官衙や寺院などに敷設されるもの」という性格を帯びている可能性が考えられる。また、駅家と想定される遺構が検出された西鳥遺跡(7:市報告118集)においても、溝より鉄滓や轆轤口が出土している。これらの製鉄・鍛冶関連遺物が駅家内での小鍛冶を立証するかは検討を必要とする(宮田1997)が、官衙周辺の検出事例を含め官営の鍛冶の職人集団の有無について、今後研究を深化させることが求められているだろう。一方、官衙遺跡から少し離れた地点になるが、干潟遺跡群(8:県87集、市報告90・102集)からは堅穴建物を中心に土坑やピットから鉄滓や轆轤口が多数出土している。渡来文化であるL字形カマドを持つ住居が多いことから、鉄器生産技術を持った渡来人が居住し、鉄器生産が行われていた可能性も想定されている。同様な傾向は、オンドル状カマドをもつ堅穴建物が発見された上岩田遺跡でも想定されており、いまだ議論の渦中である。その他、大板井遺跡(9:市報告192集)や横隈鍋倉遺跡(10:市報告26集)からも鉄滓が出土し、9世紀には小板井京塚遺跡(11:市報告201集)の堅穴建物跡から鉄滓が出土していることから、以上の製鉄・鍛冶関連遺物が出土している遺跡の周辺では鍛冶が行われていたと想定されている(山崎2005)。中世になると、今まで同様に製鉄・鍛冶関連遺物が13~14世紀代に比定できる各遺跡から検出されている。小板井屋敷遺跡(12:市報告139集)の井戸から轆轤口が、大崎東柿添遺跡(13:市報告116集)の溝からは鉄滓が、小郡正尻遺跡(14:県横断7集)の溝からは鉄滓が、小郡野口遺跡(15:市報告73集)の土坑からは轆轤口が出土した。そして、15世紀代になってはじめて、鍛冶炉跡が発見された。宝満川沿いに築かれた川港町である稲吉元矢次遺跡(16:市報告45集)では、3号大溝中央部で大量の鉄滓が出土し、周囲の土坑から焼土・炭を検出したことから、これらの土坑が鍛冶炉であり、小鍛冶の可能性が指摘されている。また、大保西小路遺跡(17:市報告99集)では、鉄滓や轆轤口が数多く土坑や溝から出土するとともに、中には壁面がわずかながら赤変した土坑や、那珂川町平蔵遺跡で検出された鍛冶工房と類似した土坑が検出されており、鍛冶炉に比定されている。また、鋳型片も出土していることから、鍛冶工房施設として機能していたことが裏付けられる。

最後に、大保西小路遺跡包蔵地内での鍛冶工房の実態について概観したい。炉跡は1次調査区と今回の調査区において検出でき、また、出土した鍛冶関連遺物も炉跡と同時代の15世紀が比定できる。つまり、大保西小路遺跡は、15世紀代の鍛冶工房であることがわかる。では、実際に検出された炉跡であるが、1次調査区で検出された炉跡は、一辺が1~2mあり大型炉に分類されるが、今回の調査区で検出した炉跡は一辺が50cm以下と小型炉に分類される。先行研究では、炉跡の大きさにより精錬鍛冶(精錬製造工程)と鍛錬鍛冶(小鍛冶)の分化が行われたと想定されているが、1次調査では鋳型片が炉跡の近隣の溝から出土していることから、大型炉であっても鍛錬鍛冶炉の可能性が高いと考えられる。また、今回の調査で検出した炉跡は小型炉であることから、鍛錬鍛冶炉の可能性が高い。したがって、大保西小路遺跡包蔵地内では、1次調査区から今回の調査区にかけて集落の中で小鍛冶が行われていたと言えよう。しかし、まだまだ未確認範囲も多い。特に、鋳型片が出土した1次調査区の南北に延びる溝と、3次調査区で検出した東西に延びる溝との関係など検討が必要である。今後の発掘調査成果を踏まえ

ながら、15世紀代の小鍛冶について検討することが求められよう。

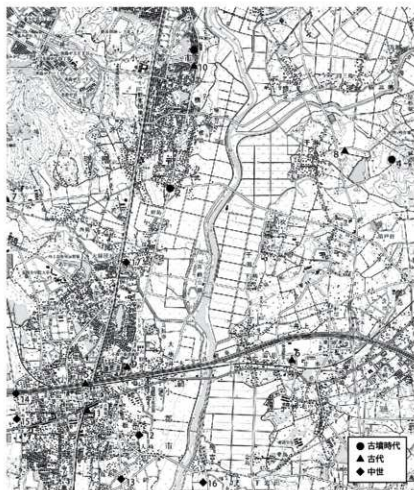
<主要参考文献> (五十音順) *集成した報告書は割愛

- 赤沼英男・佐々木聡 2009「6中世後期における原料鉄の流通とその利用」『鉄と鋼の生産の歴史』雄山閣
 網野善彦 1983「中世の鉄器生産と流通」『講座 日本技術の社会史 第5巻 採鉱と冶金』日本評論社
 柏原孝俊・宮田浩之 2001「小郡前伏遺跡」『小郡市史』第4巻 小郡市史編集委員会
 片岡宏二 1996「第2編 原始の小郡 第3章 農耕社会の形成と発展—弥生時代— 第二節 農耕文化の展開と社会の変化 1 青銅器・鉄器の出現と普及」『小郡市史』第1巻 小郡市史編集委員会
 神野信 2005「房総半島における古代精錬遺跡」『千葉県教育振興財団文化財センター研究紀要 24』
 河瀬正利 1995「第3章 たたら吹製鉄の成立と展開」『たたら吹製鉄の技術と構造の考古学的研究』淡水社
 佐々木聡 2008「第6章 中世の鋼生産と都市・集落・城館における鍛冶活動」『鉄の時代史』雄山閣
 中島圭 2008「6. 福岡県内における製鉄・鍛冶の様相」『牛頭本堂遺跡群Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第81集 大野城市教育委員会
 古瀬清秀・佐々木聡 2009「V 製鉄・鍛冶遺構の変遷」『鉄と鋼の生産の歴史』雄山閣
 宮田浩之 1997「西島遺跡5」『小郡市埋蔵文化財調査報告書第118集 小郡市教育委員会』
 山崎頼人 2005「V. 御原郡内の鉄器生産について」『小坂井塚遺跡3』『小郡市文化財調査報告書第201集 小郡市教育委員会』



第11図 大保西小路遺跡
鍛冶関係遺構配置図
(S=1/1000)

※鍛冶関係遺構に色を塗っている



第12図 小郡市内における鍛冶関係遺物出土遺跡分布図 (S=1/75000)

出土遺物観察表

1. 土器

検出 番号	調査 番号	出土遺物	器種	高さ (cm) (厚さ)	色調	胎土	焼成	調製	残存率	備考
5-1	1号溝下層	土・土	土・土	底: 6.0 高: 1.8	外: 黒(7SV9/6) 内: 黒(7SV9/8)	180以下の微砂を多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/1	底部分は糸切り。
5-2	5-1 1号溝下層	土・土	土・土	口: 11.2 底: 8.0 高: 3.2	外: 黒(7SV9/6) 内: 黒(7SV9/4)	180以下の微砂をやや多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/6	底部分は糸切り。
5-3	5-2 1号溝下層	土・鉢	土・鉢	高: 4.9	外: 黒(7SV9/3) 内: 黒(7SV9/4)	180以下の微砂を少し含む	良	外: ココナデ、ハケム、押え 内: ハケム	断一断上小片	
5-4	5-5 1号溝下層	白・碗	白・碗	底: 4.8 高: 2.4	外: 灰オリーブ(7SV6/2) 内: 灰オリーブ(7SV6/2)	180以下の微砂を多く含む	良好	外: 輪蓋 内: 輪蓋	断下～底約1/4	
5-5	5-4 1号溝下層	青・碗	青・碗	底: 3.7 高: 2.9	外: 黒オリーブ(7SV4/3) 内: 灰オリーブ(7SV5/3)	180以下の微砂を多く含む	良好	外: 輪蓋 内: 輪蓋	断下～底約1/4	見込みノ文様あり。
5-6	5-6 1号溝下層	青・土	青・土	底: 3.7 高: 1.45	外: オリーブ黄(7SV6/4) 内: オリーブ黄(7SV6/2)	180以下の微砂を多く含む	良好	外: 輪蓋 内: 輪蓋	断下～底約1/4	
5-7	5-3 1号溝下層	陶・壺	陶・壺	高: 6.55	外: 黒(7SV9/4) 内: 赤褐～灰白(10RS.4～5V7/2)	180以下の微砂を多く含む	良	外: 輪蓋 内: 輪蓋、ココナデ	断一断上小片	第5図2と同一個体。
5-8	5-7 1号溝下層	陶・壺	陶・壺	高: 7.1	外: 黒(7SV9/1) 内: 黒(7SV9/1)	180以下の微砂を多く含む	良好	外: 輪蓋、ココナデ 内: ナデ、輪蓋	断下～底小片	第5図2と同一個体。
5-9	5-19 1号溝下層	平瓦	平瓦	—	外: 灰黄(2SV9/2) 内: 灰黄(2SV9/3)	180以下の微砂をやや多く含む	—	外: ナデ 内: ナデ	小片	
6-12	5-10 2号溝	土・土	土・土	口: 11.8 底: 7.0 高: 3.3	外: 黒(7SV9/6) 内: 黒(7SV9/6)	180以下の微砂を多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/5	底部分は糸切り。
6-13	5-15 2号溝	土・土	土・土	口: 8.4 底: 6.8 高: 1.35	外: 黒(7SV9/4) 内: 黒(7SV9/4)	180以下の微砂をかなり多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/4	底部分は糸切り。
6-14	2号溝	青・碗	青・碗	高: 2.6	外: 灰オリーブ(7SV5/3) 内: 灰オリーブ(7SV5/2)	180以下の微砂をやや多く含む	良好	外: 輪蓋 内: 輪蓋	断一断上小片	内面に文様あり。
6-15	5-17 2号溝	平瓦	平瓦	—	外: 黒灰(10VS.1) 内: 黒(7SV9/6)	180以下の微砂を少し含む	—	外: ナデ 内: ナデ	小片	
6-16	5-11 3号溝	土・土	土・土	口: 11.0 底: 8.0 高: 2.8	外: 黒(7SV9/4) 内: 黒(10VS.2)	180以下の微砂を多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/4	底部分は糸切り。
6-17	3号溝	土・土	土・土	底: 3.5 高: 1.0	外: 黒(7SV9/6) 内: 黒(7SV9/2)	180以下の微砂をやや多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/1	口縁部外の外蓋が割裂している。
6-18	5-12 4号溝上層	土・土	土・土	底: 6.5 高: 1.5	外: 黒(7SV9/3) 内: 黒(7SV9/3)	180以下の微砂をやや多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/4	底部分は糸切り。
6-19	5-14 4号溝上層	土・土	土・土	底: 4.9 高: 0.9	外: 黒(7SV9/4) 内: 黒(7SV9/4)	180以下の微砂を多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/5	底部分は糸切り。
6-20	5-13 4号溝上層	土・土	土・土	底: 4.4 高: 1.4	外: 黒(7SV9/6) 内: 黒(7SV9/6)	180以下の微砂をかなり多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約3/4	底部分は糸切り。
6-21	4号溝下層	土・土	土・土	底: 4.2 高: 1.1	外: 灰黄(10RS.2) 内: 黒(7SV9/4)	180以下の微砂をかなり多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	底完整	底部分は糸切り。
6-22	5-16 4号溝下層	土・すり鉢	土・すり鉢	高: 8.8	外: 黒(7SV9/4) 内: 黒(7SV9/4)	200以下の砂粒をやや多く含む	劣	外: ココナデ、ハケム ナデ、ハケム	断一断上小片	内面にすり目あり。
6-23	4号溝下層	須賀・すり鉢	須賀・すり鉢	高: 3.5	外: 黒(10VS.1) 内: 黄(2SV9S.1)	180以下の微砂を多く含む	良好	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一断上小片	
6-24	5-18 4号溝下層	平瓦	平瓦	—	外: 黒(7SV9/6) 内: 黄(2SV9/3)	180以下の微砂を多く含む	良	外: ナデ 内: ナデ	小片	
6-25	5-20 4号溝下層	平瓦	平瓦	—	外: 黒(7SV9/6) 内: 黒(7SV9/6)	180以下の微砂を多く含む	—	外: ナデ 内: ナデ	小片	
9-26	6-5 2号土坑	土・土	土・土	口: 11.2 底: 8.4 高: 2.1	外: 黒(7SV9/3) 内: 黒(7SV9/4)	180以下の微砂を多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/2	底部分は糸切り。
9-27	2号土坑	土・土	土・土	高: 3.05	外: 黒(7SV9/4) 内: 黒(7SV9/2)	180以下の微砂をやや多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/6	底部分は糸切り。
9-28	6-6 2号土坑	土・土	土・土	口: 8.7 底: 6.0 高: 1.3	外: 黒(7SV9/6) 内: 黒(7SV9/3)	180以下の微砂を多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/4	底部分は糸切り。
9-29	6-9 2号土坑	土・土	土・土	口: 8.2 底: 6.5 高: 1.3	外: 黒(7SV9/3) 内: 黒(7SV9/3)	180以下の微砂を少し含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/6	底部分は糸切り。
9-30	6-1 2号土坑	須賀・鉢	須賀・鉢	高: 6.0	外: 灰黄(2SV9/2) 内: 灰白(2SV7/1)	400以下の砂粒を多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ、ハケム ナデ、ハケム	断一断上小片	
9-31	6-6 3号土坑	土・土	土・土	口: 14.0 底: 10.0 高: 2.4	外: 黒(7SV9/4) 内: 黒(7SV9/4)	180以下の微砂をかなり多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/3	底部分は糸切り後捺押し。
9-32	6-10 3号土坑	土・土	土・土	口: 10.7 底: 7.5 高: 1.2	外: 黒(7SV9/3) 内: 黒(7SV9/4)	180以下の微砂を多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	断一底約1/6	底部分は糸切り。
9-33	4号土坑	須賀・すり鉢	須賀・すり鉢	高: 2.4	外: 灰(5V4.1) 内: 灰(5V6.1)	180以下の微砂をやや多く含む	良	外: 自然釉、回転ナデ 内: 自然釉	断一断上小片	

採掘 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	構成	調整	残存率	備考
9-34	6-7	6号土坑	土・甕	口(102) 底(77) 高26	外に深い貫粒(10YR7/3) 内に深い貫粒(10YR7/3)	100以下の微砂を多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	口～底約1/6	底面は糸切り板押し。
10-35	P9		土・鍋	高30	外: 黒(2.5Y2/1) 内に深い貫粒(10YR6/4)	100以下の微砂を多く含む	良	外: ナデ 内: ハケメ	口～胴上小片	外壁全面にコゲ付着。
10-36	6-3	P12	土・甕	口(140) 底(134) 高14	外: 橙(7.5YR6/8) 内に深い貫粒(7.5YR6/4)	100以下の微砂を多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	口～底約1/8	底面は糸切り。
10-37	6-2	P14	土・甕	口(71) 底(56) 高155	外に深い貫粒(10YR6/3) 内: 灰黄緑(10YR6/2)	100以下の微砂をやや多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	口～胴約1/4 底完形	底面は糸切り。
10-38	P15		土・甕	底(84) 高235	外に深い貫粒(10YR6/3) 内に深い貫粒(10YR7/4)	100以下の微砂をやや多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	胴～底約1/4	底面は糸切り。
10-39	6-4	P16	土・甕	底(122) 高14	外に深い貫粒(10YR6/4) 内に深い橙(7.5YR6/4)	100以下の微砂を多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	胴～底約1/8	底面は糸切り。
10-40	P17		土・甕	底(84) 高155	外: 灰黄緑(10YR6/2) 内: 灰黄緑(10YR6/2)	100以下の微砂をやや多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	胴～底約1/5	底面は糸切り。

2. 石器

採掘 番号	図版 番号	出土遺構	種類	計測値				備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
5-10	5-9	1号溝下層	ナイフ形石器	3.7	1.7	1.05	6.4	
5-11	5-8	1号溝下層	不明石器	0.35	0.2	2.95	210.0	砥石1面

図版 1



①調査区全景（南側から）



②調査区全景（北側から）



③調査区中央より南側全景（北西側から）



④調査区中央より北側全景（南東側から）



① 1号炉検出状況（南側から）



⑤ 1号溝西壁土層断面（東側から）



② 2号炉検出状況（南側から）



⑥ 1号溝東壁土層断面（西側から）



③ 1号・2号炉検出状況（南側から）



⑦ 1号溝完掘（西側から）



④ 1号・2号炉検出状況、4号溝完掘（西側から）



⑧ 2号溝東壁土層断面（西側から）

図版 3



① 2号溝西壁土層断面（東側から）



② 3号溝南壁土層断面（北側から）



③ 2号溝完掘（西側から）



④ 3号溝完掘（南側から）



⑤ 4号溝完掘（東側から）



⑥ 4号溝西壁土層断面（東側から）



⑦ 4号溝東壁土層断面（西側から）



① 1号土坑完掘（東側から）



⑤ 4号土坑土層断面（南側から）



② 2号土坑東西ベルト土層断面（北側から）



⑥ 4号土坑完掘（南側から）



③ 2号土坑完掘（東側から）



⑦ 5号土坑東壁土層断面・完掘（西側から）

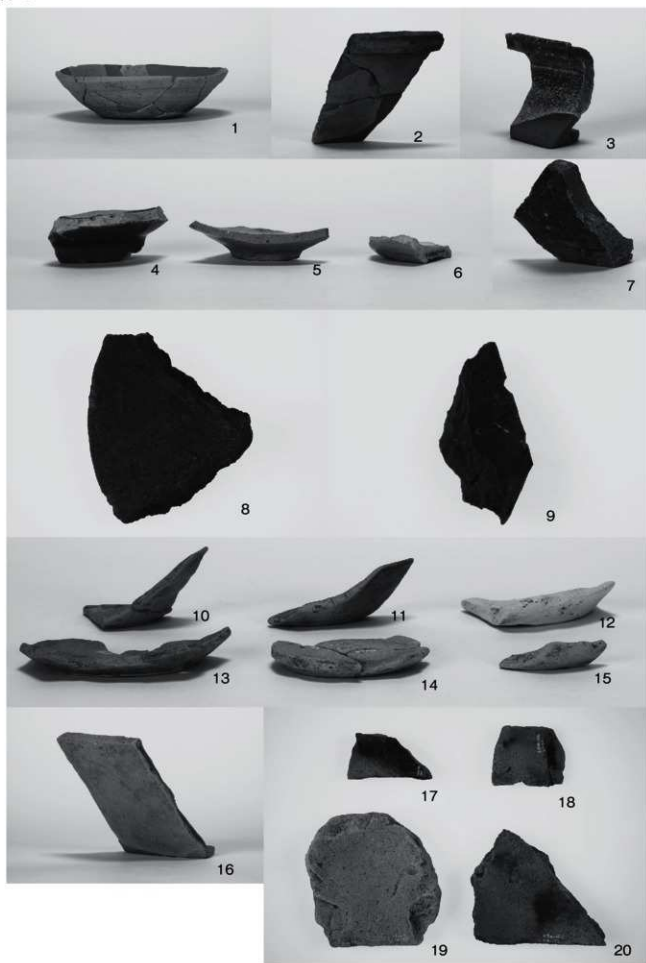


④ 3号土坑完掘（東側から）



⑧ 6号土坑完掘（南側から）

图版 5



出土遺物①



出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	おおほにししょうじいせき							
書名	大保西小路遺跡3							
副書名	福岡県小都市大保所在遺跡の調査報告							
巻次								
シリーズ名	小都市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第305集							
編著者名	西江 幸子							
編集機関	小都市教育委員会							
所在地	〒838-0198 福岡県小都市小郡255-1 Tel. 0942-72-2111							
発行年月日	平成28年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおほにししょうじいせき 大保西小路遺跡3	福岡県 小都市 大保	40216		33° 24′ 58″	130° 33′ 33″	2014.5.15 } 2014.6.5	160㎡	道路新設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大保西小路遺跡3	集落	中世	炉跡 溝 土坑 ビット	土師器 須恵質土器 青磁、白磁、陶器 石器、瓦 鉄滓	15世紀代の 小鍛冶炉2 基検出			
要約	今回の調査では、14～15世紀代の遺構を中心に検出した。大保西小路遺跡の包蔵地内では、従来中世の遺構を多数検出しており、今回の調査成果よりその広がりを確認できたと言えよう。また、1次調査区で発見されていた鍛冶炉と同時代に比定できる鍛冶炉を2基検出するとともに、周囲より鉄滓を発見した。このことから、1次調査区より今回の調査地点にかけて中世の鍛冶工房が広がっていたことがわかり、小都市内における中世集落の解明だけでなく、鍛冶工房の実態解明に向けた一歩となったと言えよう。							

大保西小路遺跡3

小都市埋蔵文化財調査報告書第305集

平成28年3月31日

編集 小都市教育委員会
福岡県小都市小郡255-1
発行 片山印刷有限会社
福岡県小都市祇園1丁目8-15